

2026.03.12



日本コミュニケーション学会 九州支部

ニューズレター No.45

— 目次 —

1. 支部長挨拶

巻頭言「国境に接して平和を考える」

西南学院大学 清宮 徹

2. JICA 九州支部 2025 年度活動報告

コミュニケーション・リサーチ・サマーワークショップ

「2025 年日本コミュニケーション学会九州支部サマースクールに参加して」

西南学院大学大学院博士課程後期 郭 仁敬

第 32 回 JICA 支部大会・沖縄スタディツアー

「第 32 回・JICA 九州支部大会 沖縄ツアーを実施して」

沖縄キリスト教学院大学 仲里 和花

「沖縄スタディツアー参加報告 ――場所に刻まれた記憶や風景との『対話』」

明治大学大学院博士課程後期 河村 まい香

「沖縄スタディツアーに参加して」

西南学院大学大学院修士課程 金 延修

3. 新規会員より

「九州支部大会の参加所感」

名城大学 宮崎 新

「新支部会員としてのご挨拶」

新潟医療福祉大学 五十嵐 紀子

4. 会員の出版図書紹介

『外国人のための日本語で学ぶライフプラン』

西日本短期大学 黒瀬 菜々

編集後記

1. 支部長挨拶

巻頭言「国境に接して平和を考える」

九州支部長 清宮徹 (西南学院大学)

昨年、私は戦争被害が残る 2 つの重要な場所を訪問し、あらためて戦争と分断、そして国境について考える機会を持ちました。一つは、九州支部大会での沖縄訪問です。戦後 80 年だった 2025 年、沖縄で支部大会を開催しその翌日のスタディツアーにて、戦争の跡と沖縄の現状を見ることができました。もう一つは、前号のニュースレターの巻頭言にも書きました SCOS (Standing Conference on Organizational Symbolism) の学会発表の場、キプロス共和国への訪問でした。ここでは、この 2 つの訪問から感じたことを共有させていただこうと思います。

沖縄は、ゼミ旅行などを含めすでに何度も訪問している場所であるがゆえに、戦争の痕跡を見て平和について考える機会が近年減ってきているように感じていました。そんな中、戦後 80 年の昨年に沖縄を訪問し、少しでもその実情を垣間見られたことは貴重な経験でした。普天間基地を見下ろす嘉数高台や「沖縄戦の図」が展示されている佐喜眞美術館などに赴き、さらに 2004 年に起きた沖縄国際大学の米軍ヘリ墜落現場を訪れました。語り部の話を聞きながら現地を視察すると、より深いリアリティとして、沖縄の戦後の歴史と現実を捉えることができました。

この時私が強く感じたのは、沖縄には国境があるということです。佐喜眞美術館は米軍から普天間基地の土地の一部を交渉の上返還してもらい、基地の真横に建設されました。ここには国境と同じ意味を持つ壁があり、壁の内側は日本ではなくアメリカであり、なおかつ海兵隊基地なのです。このような環境は沖縄の人々の生活に、大きな影響を与えています。とくに基地周辺では、落下物やヘリの墜落、暴行事件などの犯罪が発生するなど、人々がこの壁の外側で危険な環

境にさらされて生活しているのがよくわかりました。本ニュースレターではスタディツアーの参加者の報告が掲載されていますので、ぜひともご一読ください。



普天間基地を見下ろす嘉数高台

夏に訪問したキプロスでも、人々は壁とともに生きていました。これまでヨーロッパの多くの国を訪問しましたが、キプロスは学会でもない限り、なかなか訪れる機会のない国ではないでしょうか。地中海に浮かぶ 3 番目に大きい島、しかし面積は日本の四国の半分ほど、気温 40 度を超える熱い乾燥したキプロス共和国の首都であるニコシアに、私は 4 日間ほど滞在しました。キプロス大学による現地を視察するスタディツアーに参加し、この国の歴史と島の北半分を占める北キプロス・トルコ共和国との対立について、多くを学びました。キプロス島は歴史的に交通の要所であり、地中海交易の重要な拠点でした。植民地化されていたイギリスから 1960 年に独立しましたが、その後トルコ系の人々とギリシャ系の人々との間で対立が激化したのです。1974 年にはトルコ軍が島の北部を占領し、そこでトルコ系の人々による自治が行われるようになりました。

実質的にキプロス共和国から独立した国家が運営されることとなった結果、この小さな島は南北で分断され、2つの民族が別れて暮らさざるを得ない状態になりました。このキプロス紛争と呼ばれる民族の対立と武力衝突は、「グリーンライン」という国連軍が管理する緩衝地帯によって、かろうじて現在も武力衝突の無い状態が保たれています。近年は目立った衝突はなく、グリーンラインを挟んで両地域の交流も活発になっていると聞きました。北の方の物価が安いので、人々が北キプロスでガソリンを入れて南に帰るなど、経済活動が平和裏に行われているそうです。しかしこの分断された島国でグリーンラインを超えるためには、パスポートが必要です。もちろん私もパスポートを持ちグリーンラインを超え、この分断の現実とかりそめの平和を見学してきました。緩衝地帯ではかつてのホテルが国連軍の施設となっていますが、その外壁には銃弾の跡が生々しく残っています。キプロスの人々は、この緩衝地帯のおかげで大きな武力衝突を起こすことなく現在生活していますが、対立状態は常であり、いつそれが顕在化するのかは誰も予想はできません。



国連軍管理下のグリーンライン



グリーンラインに残る銃弾の跡

しかしこのスタディツアーで、希望が見出せる一つのエピソードを聞きました。グリーンラインを挟んだ2つのコミュニティの人々が、ランチを持ち寄ってピクニックを始めたそうです。物理的な分断があったとしても、交流がある限りそこには友情が芽生え人間関係が形成され、それがいつしか発展し草の根的に平和が生み出される希望があります。沖縄とは大きく状況異なりますが、戦争と国境、壁とともに生きる人々について、深く考えさせられる機会となりました。

ロシアによるウクライナ侵攻、イスラエルによるガザへの虐殺、その他アフリカやアジアなどの諸地域でも、内戦や民族対立による武力衝突が起きています。ヨーロッパだけでなく世界的レベルで政治の右傾化が進み、自民族中心主義的な声が強まっています。対立する相手を脅威として声高に示すことによる排他的な風潮が一層強まっているのは、日本も同様です。〇〇ファーストなど、愛国主義的な言説を当然とする多様性を尊重しない風潮の中で、軍事力の増強、軍事費の増大が当たり前のように叫ばれている昨今です。現代資本主義社会は戦争と分断を必要としているシステムであり、戦闘機1機100億円を超えるビジネスは、ある意味政治と暴力を後押ししていると言ってもいいでしょう。コミュニケーション研究者として、私はこれからさまざまな角度から、分断と暴力の歪んだ日常世界について考えていきたいと思っています。

2. JCA 九州支部 2025 年度活動報告(1)

コミュニケーション・リサーチ・サマースクール

2025 年 9 月、JCA 九州支部では質的研究をテーマに、若手研究者や大学院生向けのサマースクールが開催されました。研究の「型」が定まりにくいからこそ生じる悩みや迷いを共有しながら、大学の垣根を越えて率直な対話が交わされました。論文には書ききれない調査の苦労や工夫も語られ、若手研究者同士、互いの研究を励まし合う実りある時間となったようです。参加者の方に感想を書いていただきましたので、ぜひご覧ください。

2025 年日本コミュニケーション学会九州支部 サマースクールに参加して

郭仁敬 (西南学院大学大学院博士課程後期)

西南学院大学大学院・博士後期課程の郭仁敬と申します。2025 年 9 月 8 日～9 日に西南学院大学で開催されたコミュニケーション・リサーチ・サマースクールについてご報告いたします。本ワークショップにおいて、特に印象深かったのは、質的研究における「立場性」の重視と、研究者としての人生を貫く「研究の軸」の力強さです。

第一に、質的研究における「立場性」の意義について深く考えさせられました。吉武先生が研究方法のメタ理論を理解することの重要性を強調されましたが、自身の立場性を自覚することは、メタ理論の理解を深めるための不可欠な要素だと考えられます。Brummans 先生が提示された“witnessing”という概念は、まさにその一例であり、場や他者と「共に」考えながら研究を進める姿勢を学ぶことができました。これらを通じて、私自身、研究の場や調査協力者に対

する自らの立場を問い直す反省的態度の重要性を再認識しました。

第二に印象に残ったのは、先生方の研究に通底する「軸」の存在です。先生方が取り組まれてきた多様な研究テーマについてのお話から、その背後にある「実践との結びつき」(宮原先生)や「弱者の視点」(池田先生、清宮先生)といった、それぞれの一貫した問題意識がうかがえました。特に、執筆を終えてなお、原稿を投函する直前まで出すかどうか悩まれたという池田先生のお話は、研究が単なる作業ではなく、強い思いや葛藤を伴う営みであることが表れていると感じ、深く心に残っております。このような研究の軸は、意図的に設定されるというよりも、長年の問題意識や研究への思いから立ち上がってくるものなのだろうと考えます。

本ワークショップは私にとって、研究と向き合う姿

勢について考える大切な契機となりました。未熟な点ばかりですが、自身の考え方や立場を常に省みながら、時間をかけて自分なりの軸を形成してまいります。企画・準備や講義をしてくださった先生方、そして議論を共にした若手研究者・大学院生の皆様、誠にありがとうございました。

2. JCA 九州支部 2025 年度活動報告(2)

第 32 回 支部大会・沖縄スタディツアー

沖縄・那覇市で行われた本年度の支部大会では、新たな試みとしてポスター発表を導入し、お二人の先生にご発表いただきました。発表者と参加者が近い距離で議論できる形式となり、質問や意見交換が活発に飛び交う充実した時間となりました。

また、2025 年度に西南学院大学をご退任の宮原哲先生による基調講演では、先生らしいユーモアにあふれながらも、コミュニケーション研究の原点を改めて問い直す大変示唆に富むご講演でした。続く発表では、宮原先生に学ばれた学生や研究者の方々も登壇され、日本におけるコミュニケーション学研究的礎が着実に築かれ、後進へと受け継がれていることを実感できる会となりました。さらに、他支部所属であった先生方にも九州支部にご参加いただくことができるようになり、多様な視点からの意見交換がより活発に行われました。

また、それに続く沖縄スタディツアーでは、沖縄キリスト教学院大学の仲里和花先生のご尽力により、戦後 80 周年という節目の沖縄を語り部の方にご案内いただく貴重な機会も得ることができました。その文脈でしか得られない経験と感覚は、参加者に深い学びをもたらしたことと思います。本大会は、研究の継承と発展、そして新たな連携の広がりを感じさせる意義深い機会となりました。沖縄スタディツアーを企画してくださった仲里和花先生と、参加者のお二人に記事を書かせていただきました。

第 32 回支部大会
ポスター発表



第 32 回・JCA 九州支部大会 沖縄ツアーを実施して

仲里和花 (沖縄キリスト教学院大学)

2025 年 11 月 29 日(土)、第 32 回九州支部大会が沖縄で開催されたことに伴い、翌 30 日(日)に沖縄ツアーが実施された。昨年 6 月、清宮徹先生から、ツアー企画の打診を受け、私が所属する沖縄 YWCA から平和ガイドである宇根悦子さんをご紹介いただき、準備を進めた。沖縄本島中部の激戦地・嘉数高台、沖縄国際大学のヘリ墜落現場、佐喜眞美術館の 3 箇所を訪問先とし、清宮先生と宮崎新先生にレンタカーを運転していただき移動した*。参加人数は 10 名であった。

最初の訪問先である嘉数高台には、日本軍が築いたトーチカや陣地壕が残り、当時の戦闘の様子を今に伝えている。嘉数の戦いでは住民の半数以上が犠牲となり、壕からの追い出しや食糧強奪、艦砲射撃などにより、住民は軍人と同様に過酷な状況に巻き込まれた。高台中央の展望台からは広大な普天間基地が一望でき、頻繁に離発着する米軍機が、沖縄が現在も抱え続ける基地負担の深刻さを象徴していた。

次に訪れた沖縄国際大学のヘリ墜落現場では、2004 年 8 月に米軍ヘリが墜落した際、米軍が現場を封鎖し、日本の警察・消防・行政・大学関係者は一

切立ち入れなかったという、日米地位協定の歪さを象徴する出来事について説明を受けた。今も黒焦げの木々の幹や壁の断片が残り、基地のある街に暮らす人々が日常的に危険に向き合っている現実を感じる場所であった。

最後に訪れた佐喜眞美術館では、丸木位里・俊夫妻の大作『沖縄戦の図』を鑑賞した。家族同士が傷つけあう集団強制死、戦火に巻き込まれ命を奪われた人々の姿、そして中央で無表情にそれらを見つめる黒目のない子どもたち。悲惨な戦争の記憶が迫ってくるようで、参加者の中には鳥肌が立つ人や涙ぐむ人もいた。

終了後には、「以前から訪れたかった佐喜眞美術館に来られてよかった」「基地のフェンスが生活のすぐそばまで迫り、危険と隣り合わせである現状を初めて知った」との感想が寄せられた。今回、九州支部の会員の皆様に沖縄の負の歴史と現在の課題を知っていただけたことは大きな成果であり、企画して本当によかったと感じている。

*当日は仲里和花先生にも車を出していただき、合計 3 台で移動しました。(編集者補足)

沖縄スタディツアー参加報告——場所に刻まれた記憶や風景との「対話」

河村まい香 (明治大学大学院博士課程後期)

ニューズレターへはじめて寄稿させていただきます、明治大学の河村と申します。私は現在「AI 時代の企業組織における上司-部下間の対話実践」を研究しており、九州支部が掲げる大会テーマに、自身の課題意識と深い共鳴を感じてきました。先生方や院生の皆様

と、領域を越えた創造的な対話が叶うこのコミュニティに惹かれ、関東より参加しております。

大会 2 日目に開催された沖縄スタディツアーでの記録を、本稿では綴らせていただきます。最も印象に残ったのは、嘉数高台から眼前に広がった普天間基

地の風景です。住宅地の只中に横たわる滑走路や整然と駐機された軍用機は、戦争の記憶が過去の遺物ではなく、今この瞬間も現在進行形の問題として在ることを可視化していました。

関東で生まれ育った私にとって、基地問題はこれまでニュースの中で見聞きする、手触りのない遠い場所の出来事でした。しかし、実際にその場に立ち平和ガイドの宇根悦子さんのお話を伺う中で、基地が地元の方の雇用の場であり、経済循環の一部でもあるという実状や、その一方で常に生命の危険と隣り合わせであるという不条理な構造があることを学び、複雑な利害と歴史の重みを受け止めました。

前回の JCA 全国大会が広島で開催されたことも、連関を感じずにはいられません。戦後 80 年が経過し、記憶の継承が形式化されるほど、時間の距離とともにそれが他人事へと変質しかねない危うさがあります。いかにして意味を個人の実感へと引き寄せるのか。その問いの先に、私が研究する「対話」の重要性があります。

沖縄スタディ ツアーに参加して

バフチンの対話論に拠れば、対話とは単なる情報の交換ではなく、他者の声が自身の視点と交差することで、新たな意味が立ち現れる創発的なプロセスです。今回のツアーで宇根さんの語りや場所に刻まれた事実に触れることは、私にとって単なる知識の習得ではありませんでした。それは、それまで持っていた自身の理解と、目の前の複雑な現実と向き合うことで、自分なりの応答を試みる経験でもありました。

実際に場所へ赴き、他者の声を受け入れ視野を広げることがいかに対話の起点となるか。本ツアーは、その重要性を問い直す得がたい時間となりました。貴重な機会に心より感謝申し上げます。

金延修 （西南学院大学大学院修士課程）

私は現在、日本の大学で日本人学生に韓国語を教えています。K ドラマや K-POP をきっかけに韓国に関心を持つ学生が増えている一方で、日韓関係には歴史的な背景からくる距離感も存在します。こうした現実をより深く理解したいという思いから、私は社会人として大学院に進学し、異文化コミュニケーションを研究しています。

今回の沖縄スタディツアーは、私にとって歴史と向き合う貴重な機会でした。嘉数高台公園、佐喜真美術館、沖縄国際大学の現場を訪れ、戦争や基地問題の歴史、そしてそこで生きてきた人々の記憶に触れました。特に印象的だったのは、沖縄の歴史が単なる過去

の出来事ではなく、現在の社会や人々の感情と深く結びついているという点です。多くの犠牲の上に成り立つ歴史を前に、私はことばにしがたい複雑な思いを抱きました。

韓国で育った私は、幼い頃から植民地支配の歴史を学び、そこに伴う怒りや悲しみの感情に触れてきました。今回沖縄で感じたのは、それとどこか響き合う、人々の心に残る記憶の重さでした。日本の「恥」の文化、韓国の「恨（ハン）」という情緒、そしてまだ一言では表せない沖縄に根付く独自の文化や情緒にも強い関心を抱くようになりました。こうした文化的背景が、歴史の受け止め方や対話の難しさに影響しているの

ではないかと考えていましたが、今回の経験はその思いをさらに強くするきっかけとなりました。私は現在、「軍艦島をめぐる異文化対話」を研究テーマとして取り組んでいます。このテーマは、日韓両国の対立の正誤を問うのではなく、異なる記憶や感情をどのように理解し合えるのかという問いから生まれたものです。沖縄での学びは、歴史を知ることが他者理解の出発点であると改めて気づかせてくれました。この気づきは、今後の研究と教育の両面に大切な意味を持つものだと感じています。

3. 新規会員より

九州支部大会の参加所感

宮崎新 (名城大学)

25年度から導入された二支部制度をきっかけとして、11月29日に沖縄で開催された九州支部大会、ならびに翌30日の沖縄スタディツアー(嘉数高台公園、沖縄国際大学、佐喜真美術館)に参加させていただきました。九州支部の先生方とは、これまでも年次大会以外にも交流の機会に恵まれ、多くを学ばせていただきましたが、今回、支部大会に初めて対面で参加できたことは、私にとって非常に有益な経験となりました。

支部大会の規模を超える充実した研究発表やポスターセッション、さらには半日の出来事とは思えないほど密度の高いスタディツアーなど、二日間を通じて多くの学びを得ることができました。なかでも特に印象的であったのは、支部活動を牽引する若手研究者のみなさんの姿勢、雰囲気、関係性です。これまでのやり方を単に踏襲するのではなく、支部活動、学会全体の今後等に対して、周囲を巻き込みながら新たな研究・教育活動を模索しようとする熱意に触れ、大きな

刺激を受けました。

実地参加だからこそ生まれた数々の偶発的な出来事は、学術的な学びにとどまらない、貴重な収穫となりました。沖縄という地で、多様な企画を盛り込んだ支部大会を開催するにあたり、運営に携わられた先生方には多大なご尽力があったことと拝察いたします。このような貴重な機会に参加させていただき、誠にありがとうございました。



新支部会員としてのご挨拶

五十嵐紀子 (新潟医療福祉大学)

私が CAJ(現 JCA)に入会したのは、大学院生になりたての頃でした。そして初めての学会発表が九州での年次大会だったのを覚えています。九州には初上陸。九州は新潟育ちの私には異国にも感じられ、さらに懐の深い九州支部の皆さんの雰囲気魅了され、度々九州支部大会にお邪魔していましたが、この度、九州支部会員のお仲間に入れていただき、喜びもひとしおです。多くのJCA会員が海外留学をされている中で、日本にしかいなかった私は同じ環境の仲間がおらず、長い間肩身の狭い思いをしていました。

ですが、九州支部の若手研究者の皆さんが、精力的に研究活動に取り組んでいる姿を目の当たりにし、正直うらやましく思いつつも、自分の立ち位置のままでもできることがまだまだある、ということを選び、勇気をいただきました。これからのJCAの希望、宝ですね!

無類の猫好きで、プライベートも仕事も、果ては研究までも猫に侵食されてきています。大学内にねこ部を作りましたが、JCAにもねこ部を作ることを妄想しています。

4. 会員の出版図書紹介

移民女性のリプロダクティブ・ジャスティス・プロジェクト (著)

『外国人のための日本語で学ぶライフプラン』スリーエーネットワーク、2025年9月22日

黒瀬菜々 (西日本短期大学)

本書は、コミュニケーション学の理論そのものを扱う書籍ではありません。しかし、私が近年研究対象としている、留学生を対象としたSRHR(性と生殖の健康と権利)授業の実践とも深く関わる、生活の中の意味づけを支えるテキストです。執筆協力者の一人として、外国人の方が日本で生活する中で、自分の心と体を守りながら暮らしていくために必要な情報を「やさしい日本語」でまとめました。

構成としては、第1章で自分のライフプランについて考えることから始まり、第2章では差別や性的同意、ハラスメントなど、人権に関わる問題を扱っています。



続く第3章では在留資格や労働法といった制度面の基礎を整理し、第4章では妊娠やリプロダクティブ・ヘルス/ライツについて知るための情報をまとめています。第5章では、困ったときの相談先や、どのように行動すればよいのかについて具体的に示しています。

本書では、専門的な知識を一方向的に伝えるのではなく、問いかげやガイドを通して、学習者と一緒に考えていける構成を意識しました。

心や体の問題、医療機関とのやり取り、相談行動などをめぐる内容は、ヘルスコミュニケーションの観点からも重要なものだと考えられます。また、執筆にあつ

ては、執筆担当者それぞれが日本語教育の現場で学習者と向き合ってきた経験をもとに、相互行為を通して学べる教材となるよう工夫しています。

日本語教師の方はもちろん、留学生支援に関わる大学・日本語学校の教職員、地域で外国人を支える相談員、医療・福祉・労働の現場で外国人と関わる方々など、さまざまな立場の方に手に取っていただけたらと思っています。

編集後記

ニューズレター第45号が何とか発行に至りました。

2025年度は、ワークショップやスタディツアーの実施に加え、新たにポスター発表を導入するなど、多彩な取り組みが行われました。そこで参加された方々の声をぜひお届けしたいと考え、本号の内容を構成いたしました。会員の皆様には、さまざまな立場の方々から寄せられた感想やご意見をお読みいただき、来年度以降のさらなる活発な学会活動につなげていただけたら幸いです。

年度末のご多忙の折にもかかわらず、執筆・編集にご協力くださいました皆様に、改めて心より御礼申し上げます。

ニューズレター担当： 西日本短期大学 黒瀬菜々